http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１４８１号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

音　楽　第32号
－小学校，盲・聾・養護学校対象－
平成17年５月発行

創造的で豊かな能力を養う表現活動の工夫

人間は，生まれながらにして音や音楽を聴いたり，表現したりしようとする潜在的な能力をもっている。小学校における実際の学習活動では，児童の潜在的な能力に働き掛け，児童の中に潜んでいる様々な可能性を引き出し，育て，伸ばしていく必要がある。

低学年の児童は，音楽に合わせて自ら体を動かすことを喜び，音楽の快いリズムに体全体で反応して音楽を楽しむ傾向が強くみられる。

中学年になると心身の発達が著しく，知的側面の成長に伴って理解力も増してくる。また，音楽に対するイメージも豊かになり，自己表現の意欲も次第に高まってくる。そして，音楽の構成を感じ取ったり，表現を友達と協力して工夫したりするなど，主体的な活動や集団で協力する活動を好む傾向がみられるようになる。

高学年になると，心身の発達に伴って内面的な成長が著しくなり，美へのあこがれや探究心とともに社会性も高まってくるので，論理的な思考ができるようになる。また，これまでの音楽経験を基に，興味のある音楽や未知の音楽の世界により深くかかわろうとする気持ちが強くなってくる。しかし一方では，「思うように声が出ない」，「音程がうまく取れない」などの理由から，人前で歌うことへの羞恥（しゅうち）心や身体表現を取り入れながら歌うことへの抵抗感なども，この時期に表れるものである。

このような高学年としての特徴を踏まえ，中学年までに培われた諸経験を基盤として，児童が主体的，創造的に音楽にかかわり，自らの表現の意図やイメージ，思いなどを膨らませながら，音楽表現の仕方を工夫したり，音楽を聴いて積極的にそのよさや美しさを味わったりすることができるような学習活動を展開していく必要がある。さらに，魅力のある教材を選択し，学習指導を工夫することで，児童が音楽活動に取り組もうとする意欲を，一層高めることが大切である。

そこで，本稿では，高学年の児童にとって身近でリズムに乗って親しみやすく，自然に身体表現することができるような教材（ゴスペル・ソングの教材化）を通して，表現する喜びを味わい，意欲を高め，創造的で豊かな能力を養うことができる表現活動の工夫について述べる。

１　創造的な表現活動

(1) 創造的な表現活動とは

音楽における表現とは，人間が内面にあるもの（思いや考え，感じたことなど）を音や音楽を媒体として外界に示す・さらけ出すこ

とである。例えば，児童がある音楽に触れ，その音楽を自分で歌ったり，演奏してみたいと思い，自由に自己を表現したりすることにより，個性が表出し，創造力の発露へと発展する。このような一連の活動が，創造的な表現活動である。児童が創意工夫を凝らした取組は，すべて創造的な表現活動ととらえることができる。

(2) 指導のポイント

指導に当たっては，音楽をつくって表現する活動を含め，歌唱や鑑賞，器楽演奏などにおいても，児童の個性や創造力を大切にすることが必要である。また，児童が学習した楽曲を自分のものとして解釈して歌うことや，音楽を聴いてその曲にふさわしい自由な身振りの身体表現をすること，器楽曲を曲想や音楽を特徴付けている要素を生かして表現するにはどのように演奏したらよいかなどを工夫することが大切である。

2　ゴスペルへの挑戦

(1) ゴスペルとは

元来は，新約聖書の中の福音を意味するもので，イエス・キリストの生涯を綴った作品である。アメリカにおいて，黒人奴隷たちが労働の合間や仲間の葬式，教会やその他の集会などにおいて，自由と解放を願いながら神への訴えを綴った黒人霊歌がルーツである。それが，賛美歌と融合し，音楽的にも多様なスタイルを包含していったポピュラーな教会音楽のことを，「ゴスペル（ソング）」と称するようになった。

(2) ゴスペルの教材化

ゴスペルの主な特徴は，躍動感のある独特なリズムである。また，「コール・アンド・レスポンス」と呼ばれる声部の掛け合いや，ジャズで用いられるメロディを少し崩して自分らしさを表現する「フェイク」と呼ばれるポピュラー音楽特有の即興的な表現，自然な身体表現などが挙げられる。

前述のとおり，高学年の児童は，身体表現への抵抗感があり，表情も硬くなりがちである。そこで，リズムに乗りやすく，歌詞の内容に夢や希望といった言葉がよく使われているゴスペルを取り扱うことにより，歌うときの明るい表情や自然な身体表現につながることが期待される。また，人前で歌う自信がなかったり，他のパートにつられやすかったりする児童にとっては，「コール・アンド・レスポンス」や「フェイク」の表現活動を通して，楽しく温かい雰囲気の中で，自然な発声や正しいリズム，音程などの表現の技能を身に付けることにもつながると考える。

ゴスペルの特徴を十分に生かし，教材化していくことは，児童の学習意欲を高め，創造的な学習活動の展開につながると言える。

3　ゴスペルの教材化を図った実践例

(1) 題材　「きれいなひびきで」(第５学年)

(2) 教材　「OH，HAPPY　DAY」
　　「天使にラブソングをⅡ」

(3) 指導目標

ア　ゴスペルに関心をもち，人の声の特徴を感じ取って聴いたり，進んで表現しようとしたりする。

イ　ゴスペルのもつよさを生かして，リズムに乗り，声の重なりの響きを味わい，曲想に合った表現の工夫をする。

(4) 題材の展開（全５時間）

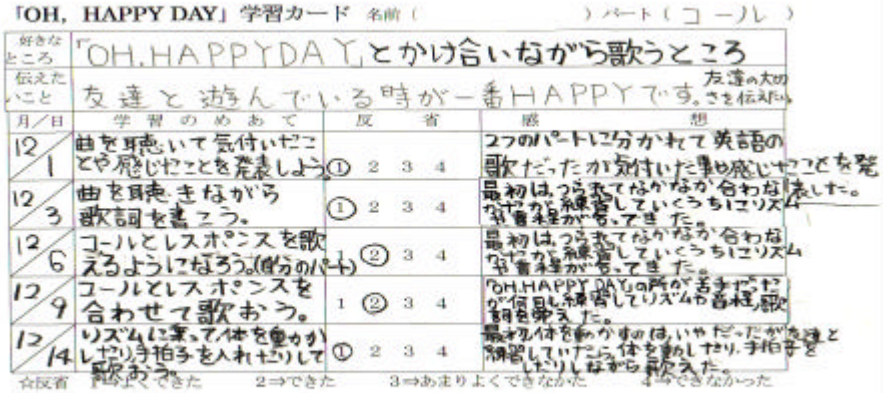
時	主な学習活動・児童の姿	教師の働き掛け
1	曲を聴いて気付いたことや感じたことを発表しよう。 (1)「OH,HAPPY DAY」を聴いて，気付いたことや感じたことを発表し合う。 〈気付いたこと〉 ・同じ言葉（OH,HAPPY DAY）が繰り返されている。 ・一人の人が先に歌い，後から大勢で歌って掛け合いになっている。途中から二部合唱になって，曲の感じが違う。 ・歌声が，段々強くなってくる。 〈感じたこと〉 ・声が，力強くて太い。よく響いている。堂々としている。 ・リズムに乗って楽しそう。発音が，はっきりしている。 ・楽しそうで，幸せな気分になる。	・聴く観点を具体的に示し，感想を書き留めておくようにする。 ・児童の感想を，気付いたことと感じたことに分けてまとめる。 ・児童の発表した内容を生かしながら，学習計画を立てるようにする。
2	曲を聴いて，歌詞を書き取って歌ってみよう。 (1)「OH,HAPPY DAY」を聴きながら，歌詞を書いていく。 ・繰り返し何回も聴いたら書き取れるようになってきた。 ・繰り返し聴くうちに，音程やリズムが自然ととれるようになった。 (2) 自分で書いた歌詞を見ながら「OH,HAPPY DAY」を歌ってみる。 ・友達と歌ってみると，少しずつ歌詞が分かってきた。	・自分が聴き取った歌詞を，片仮名で書くように指示する。 ・歌詞を書き取りにくい場合は，そのフレーズを何回も繰り返し聴いたり，口ずさんだりしながら聴くようにする。
3	コールとレスポンスを歌えるようになろう。 (1) コールとレスポンス，どちらを選ぶかを決める。 (2) 課題を決めて，パート練習をグループ(７～８人)ごとに行う。 ○ コール ・出だしをもう少しはっきり歌った方がいいな。 ・高い音の歌い方を工夫しよう。(前へ，遠くへ) ・リズムに乗れるように手拍子を入れよう。 ○ レスポンス ・低い音が地声になる。（前へ，遠くへ，響かせて） ・明るい顔，明るい声で歌ってみよう。 (3) 同じパート内でグループごとに発表し，気付いたことを発表し合う。 ・手拍子を入れた方がリズムに乗って歌いやすい。 ・手拍子の他に身体表現を入れたらよい。 ・表情が，明るくなってきた。	・児童の考えを尊重しながら，児童一人一人の個性や合唱のバランスを考慮する。 ・途中でパートを変えてもよいことを伝える。
4	コールとレスポンスを合わせて歌ってみよう。 (1) 二つのパートを合わせて歌う。 (2) パートごとに音程がつられるところを，繰り返し練習する。	・グループごとに，一人ずつ歌ってみるようにする。
5	気持ちを込めながら工夫して歌おう。 (1) DVD「天使にラブソングをⅡ」を鑑賞し，感想を発表する。 (2) 工夫することを話し合う。 ・恥ずかしがらず，明るい気持ちで歌う。 ・自信を持って思い切って声を前へ出す。 ・心を込めて歌う。自分が伝えたいことを決めて歌う。 ・手拍子の音を明るくする。 (3) 自分の伝えたいことを書いてみる。どんなときに自分が幸せな気持ちになるのか考える。 (4) 話し合ったことを基に練習し，全員で歌う。	・これまで練習してきて良くなってきた点を称賛し，児童に自信をもたせる。

（鹿児島市立城南小学校　松田恵子教諭の実践例を基に作成）

(5) 児童の変容

右の学習カードに表れているように，児童は自分なりの目標をもち，主体的に曲想にあった表現を工夫していった。

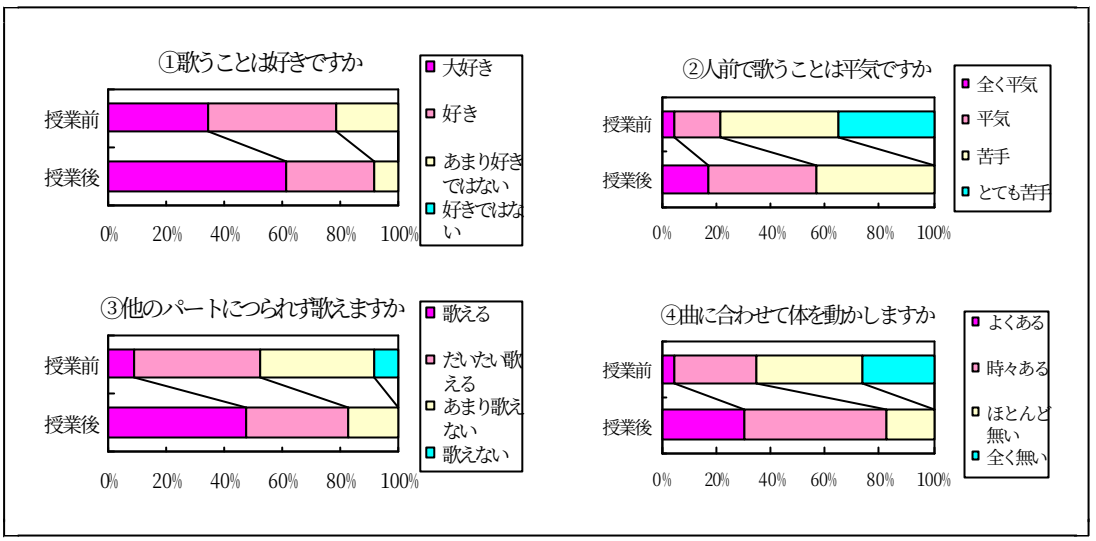
授業の前後で，児童の実態を比較したものが，次のグラフである。


「OH, HAPPY DAY」学習カード　名前（　　）パート（コール）

好きなところ	「OH,HAPPYDAY」とかけ合いながら歌うところ
伝えたいこと	友達と遊んでいる時が一番HAPPYです。友達の大切さを伝えたい。

月/日	学習のめあて	反省	感想
12/1	曲を聴いて気付いたことや感じたことを発表しよう。	① 2 3 4	2つのパートに分かれて英語の歌だったが気付いた事や感じたことを発
12/3	曲を聴きながら歌詞を書こう。	① 2 3 4	最初は，つられてなかなか合わなかったが練習していくうちにリズム感覚が育ってきた。
12/6	コールとレスポンスを歌えるようになろう。(自分のパート)	1 ② 3 4	最初は，つられてなかなか合わなかったが練習していくうちにリズム感覚が育ってきた。
12/9	コールとレスポンスを合わせて歌おう。	1 ② 3 4	「OH,HAPPY DAY」の所が苦手だったが何回も練習していくうちに自然に歌詞を歌えた。
12/14	リズムに乗って，体を動かしたり，手拍子を入れたりして歌おう。	① 2 3 4	最初は体を動かすのはいやだったが友達と練習していたら，体を動かしたり，手拍子をしたりしながら歌えた。

☆反省　1⇒よくできた　2⇒できた　3⇒あまりよくできなかった　4⇒できなかった



このように，興味や関心・意欲・態度（グラフ①・②）や表現の技能（同③），表現の工夫（同④）において児童の変容がみられた。この実践のポイントをまとめると次のようになる。

ア　音楽を何回も繰り返して聴くことで，リズムや旋律だけでなく，楽曲を特徴付けている要素や表現の仕方などに気付いたり，感じ取ったりして，自分たちで考えながら進んで歌うことができるようになった。

イ　気付いたり，感じたりしたことを，自分たちの表現に生かそうとするようになった。

ウ　身体表現を取り入れながら歌った方が，よりよい表現ができることに気付き，表現を工夫するようになった。

エ　歌詞カードや楽譜を用いないことから，英語の歌詞をしっかり聴こうとし，意識して発音に気を付け，言葉を大切にして歌えるようになった。

オ　響きがあり，しかも自然で無理のない声で歌おうと心掛けるようになった。

4　創造的な学習活動の充実を目指して

この実践例では，児童にとって未知の音楽の世界であるゴスペルに挑戦することで，音楽科の学習指導における次の大切な視点がしっかりと踏まえられている。

① 教師・児童で立てる学習計画［第１時］
② 「聴く」活動の大切さ［第２時］
③ 楽しい雰囲気でのグループ活動の工夫［第３・４時］
④ 児童が主体的に行う表現の工夫［第３～時］

児童が楽しい音楽活動を通して，音楽の喜びを得るとともに，生活を明るく豊かにし生涯にわたって音楽に親しむことのできる力を身に付けるようにするためには，児童一人一人が個性的で創造的な学習活動をより活発に行うような学習指導を進めていく必要がある。すなわち，深い音楽的な感受に基づいて，児童が自ら考え，判断し，自己を表現し，さらに互いの表現を分かち合っていくという，主体的な学習を展開していくことが大切である。

その実現のためには，何よりも教師自身が主体性や創造性をもち備え，毎日の授業で児童以上に創意工夫をする必要がある。

（教科教育研修課）